東日本大震災10年 復興の軌跡

明日への伝言

震災からの復興に音楽が果たしてきた役割などについてコーディネーターの伊藤みやさんと千田祥子さんにお話を伺いました。

第3回　音楽の力による復興センター・東北

東日本大震災から2週間後に仙台フィルハーモニー管弦楽団と市民有志により立ち上げ。復興公営住宅などで小さな演奏会を行う「復興コンサート」や、月命日（11日）に開催するメモリアルコンサート、「みやぎの『花は咲く』合唱団」の活動支援などを行っています。

音楽の力による復興センター・東北☎797-0233、ホームページ http://ongaku-fukko-tohoku.jp/

▲メモリアルコンサートの様子

被災された方々に寄り添う小さな音楽会

音楽の力による復興センターが初めての復興コンサートを開催したのは、震災からわずか2週間後でした。日常生活もままならない中で音楽に何ができるのかという葛藤を抱えながら始まった演奏。伊藤さんは「演奏を聴いた方からの『つらくて泣けなかったけど、やっと涙を流すことができて、少しだけ楽になれた』という声に音楽家自身が音楽の力を確信し、それが現在まで活動が続く原動力になっていると思います」と振り返ります。これまで避難所や仮設住宅、復興公営住宅の集会所などで開催されたコンサートは950回以上にも及びます。

演奏する側と聴く側の距離がとても近く、プロのクラシック音楽家の息遣いが感じられるほどの小さな音楽会。合間にお話ししたり、皆で一緒に歌ったりすることもあるそう。震災後数年は海に関する曲は避けて選曲するなど、音楽家やコーディネーターのお二人が被災者の状況やニーズをくみ取りながら続けてきました。「大きなホールでの演奏会とは違って、生活に身近な小さな会場で目の前の方々に向けて演奏ができるからこそ、ダイレクトに伝わるものがあると思います」と千田さん。年月がたつにつれ、被災者の方々の表情に次第に笑顔が戻り始めました。伊藤さんは「音楽が心を潤したのを肌で感じました。明るい歌のリクエストが増え、音楽を楽しむ雰囲気になってきたと感じます」と話します。

また、「音楽を聴きにおしゃれして出掛けることが嬉しい」「震災で離れ離れになった近所の人と数年後に音楽会で再会できた」という声もあったそうです。最近では復興公営住宅で住民同士が知り合う機会として依頼を受けることも。音楽会は、コロナ禍の中、感染対策にも気を配りながら、現在も続いています。

▲参加者の趣向に合わせて演奏することも復興コンサートの魅力。クラシックだけでなく、童謡・演歌・歌謡曲なども演奏します

感情を解きほぐし、人と人とを結びつける音楽の力

演奏後に参加者から届けられるさまざまな声に、やって良かったと感じることが何度もあったと話すお二人。伊藤さんは「終了後にボソッと『生きてて良かった』と言われたことがあります。笑顔も涙も含めて、心がほぐれる場がつくれて良かったと思います」と話し、千田さんも「亡くなられた旦那さんが好きだった曲を聴いて、泣き出された方もいました。音楽には心を動かす作用があり、自分と対話する時間を届けていると感じます」と話します。震災から数年たって、やっと音楽を聴いてみようという気持ちになって参加した方もいたそう。お二人は「聴きに行こうと思うまでの時間も人それぞれ。その時に音楽が寄り添えるよう、長く活動を続けていきたい」と展望を話してくれました。

震災から10年、活動内容にも変化が見られます。地域の皆さんで合唱団をつくるなど、自主的な活動に発展して、そのお手伝いを頼まれることも。千田さんは「その時々で求められるものは違います。その声をしっかり拾い続け、応えていきたい」と話します。伊藤さんも「私たちは、数百年前に生まれたクラシック音楽に今、癒やされ助けられています。その音楽の力を信じて、これからも音楽を届けていきたい」と未来への思いを語ってくれました。

▲伊藤さん（左）と千田さん（右）

［発行］仙台市総務局広報課　☎022・214・1150　FAX022・211・1921
〒980-8671 仙台市青葉区国分町3-7-1
som001020@city.sendai.jp

VEGETABLE OIL INK　再生紙を使用しています　紙へリサイクルできますので、雑誌として分別してください